

平成23年度 事業報告

財団法人 滋賀県陶芸の森

◇基本方針ならびに重点事項

平成23年度は、指定管理者制度二期目最初の年であり、これまで蓄積してきた情報と企画力、また技術力や国内外の人的ネットワーク、収蔵作品等の活用、施設管理などのノウハウを基盤にしなが、滋賀県の伝統文化であり産業である信楽焼をベースに、陶芸館、信楽産業展示館、創作研修館の三つの施設の運営をおこなった。そして、県民の陶芸に対する理解と親しみを深め、広く陶芸に関する交流の場として、地域性と国際性および現代性を備えた魅力ある事業を展開することで、陶器産業の振興と陶芸文化の向上に努め、また平成24年度を目途に、公益財団法人への移行を手続きを進めるとともに、公益性に基づいた適切な財団運営管理に努めた。

陶芸館では、19世紀イギリスのアーツ&クラフツ運動におけるデザインの巨匠の回顧展を開催し、人々の生活を豊かにする優れた陶磁器産業デザインを紹介した。また特別企画では、「開かれた美術館」として、近江の“街道”や“グルメ”という、誰もが親しめる身近なテーマから、近江の古陶磁や陶芸家の器、現代の食を題材にした陶の造形作品を紹介した。

創作研修館では、様々な作風を持つ著名な陶芸家を招聘するとともに、国内外からのスタジオ・アーティストの受入れをおこなった。これらの陶芸家と産地との交流を図るために、「創作研修館オープン・スタジオの日」を設け、滞在作家らによるレクチャーやワークショップをおこなった。

I. 県民に親しまれる施設運営に関する事業

太陽の広場や星の広場など人々が自由に憩い楽しめるよう公園や施設を安全かつ清潔に保ち、芝と植栽の管理に努め、入園者に快適な空間とサービスの向上に努めた。

1. 公園機能の充実

(1) 陶芸作品の野外設置

野外設置の整備をおこなった。また、新たに作品2点を園内に設置し野外美術館として、自然の中で広く県民が芸術作品を鑑賞できる機会を提供した。

設置作品 アディル・ライター（平成23年度ゲストアーティスト）作 「ブック」 2点

(2) ボランティア活動推進事業

来園者に対するサービス向上と陶芸文化の普及活動のため、展覧会展示解説、連携授業補助、園内PR活動、陶芸館展示監視補助、園内園芸作業などボランティアによる活動支援を受け、より積極的に進め、利用者へのきめ細かなサービスを提供した。また活動の推進やボランティア同士の連携を目的としたミーティングを開催した。

活動実績 計43日 延べ170人

2. 地域の観光拠点としての集客促進事業

信楽焼の抱える滋賀県南部地域の観光拠点としての陶芸の森は、いかに地域資源を活かしながらリピーターをつくっていくかが課題であり、集客促進のひとつとして、やきものファンに信楽をより知ってもらうために、各種講座や作家市、様々なレクリエーションイベントを開催し、来園者にとって魅力的な陶芸の森を創り、また、びわこビジターズビューローや観光協会等と連携し、陶芸の森を含めた信楽の地域資源を活かした観光企画等を提案し誘客促進に努めた。

(1) しがらき体験 しがらき学ノススメ！

陶芸の森の施設を活用して信楽焼について広く学んでもらえるよう開催した。初心者から楽しめるうつわづくりや技法別の講座、また穴窯による作品の制作など幅広いテーマを取り上げた。

ア 実技講座シリーズ(講座開催回数：9回、参加者数170名)

やきものについて、広く学ぶことができる実技講座を開催した。

(ア) 手びねりでうつわをつくる

<開催期日> 6月19日(日)

「手びねりでうつわをつくろう！食のうつわをつくる」

講師の初心者にもわかりやすい手びねりの指導のもと、カップ、皿などの食卓で使用する作品を制作した。講師：宮地 恵子、参加者数：16名

<開催期日> 12月3日(土)

「手びねりでうつわをつくろう！花のうつわをつくる」

講師の初心者にもわかりやすい手びねりの指導のもと、花入れなどの作品を制作した。

講師：川崎 琢介、参加者数：8名

(イ) 技法別講座 ミニ窯をつくろう！

<開催期日> 3月4日(日)

講師の指導のもとぐい飲み、湯呑みなど数個焼くことができるミニ窯を制作した。後日、ミニ窯での焼成を体験した。講師：奥田 文悟、参加者数：19名

(ウ) 技法別講座 “ラク焼”の茶碗をつくろう！

<開催期日> 5月15日(日)及び12月4日(日)

講師の指導のもと、ラク焼きの茶碗を制作した。後日、作品の焼成もおこなった。

講師：奥田 英山、参加者数：19名(5月15日)18名(12月4日)

(エ) 技法別講座 イッテコイ窯で作品を焼成しよう！

<開催期日> 11月13日(日)

講師の指導のもと、食器、茶碗など自由に作陶し、イッテコイ窯で焼くまたは釉薬を掛けて焼成した。講師：石山 哲也、参加者数：19名

(オ) 技法別講座 鍋奉行もうならせる土鍋をつくろう！（特別企画「グ・ル・メなやきものたち」関連企画）

<開催期日> 11月6日(日)

講師の指導のもと、最大30cmほどの土鍋を制作した。講師：細川 政巳、参加者数：24名

(カ) 技法別講座「陶芸館特別展 ウィリアム・ド・モーガン」 関連企画 技法別講座2 19世紀イギリスのラスター彩技法で絵付けしてみよう」

<開催期日> 5月22日(日)及び6月18日(土) (応募者多数につき追加開催)

展覧会の出品作品と同じ技法、ド・モーガンが再現したラスター彩で飾皿をつくった。講師：創作研修課スタッフ、参加者数：27名(5月22日)、20名(6月18日)

イ 穴窯体験講座の開催(講座開催回数：5回、参加者数70名)

信楽焼の伝統技術、歴史を広く一般の方に知ってもらうため、信楽町内在住の陶芸家による指導のもと作品をつくり、穴窯で焼成し、知識と技術の普及をはかった。

・「穴窯講座(初級向け)ー自由制作」(9月11日(日))

講師の指導のもと、食器、茶碗など自由に作陶した。講師：神山直彦、助手：榎本 佳子、参加者数：17名

- ・ 「穴窯講座（初級向け）－干支をつくる」

<開催期日> 9月18日（日）

講師の指導のもと、干支の置物を制作した。講師：石山哲也、助手：鈴木由衣、

参加者数：11名

- ・ 「特別企画グ・ル・メなやきものたち関連企画 穴窯講座（中級向け）－懐石の器 変形鉢をつくる」

<開催期日> 9月19日（月・祝）

講師の指導のもと、展覧会に出品されている作品をヒントにしながら、懐石具としても使える変形鉢を制作した。講師：五代 上田直方、助手：榎本佳子、参加者数：13名

- ・ 「穴窯講座（上級向け）－大壺をつくる」

<開催期日> 10月1日（土）・2日（日）

講師の指導のもと、大壺を10kgの粘土を使用し2日間にわたって制作した。講師：神崎継春、助手：鈴木由衣、参加者数：14名

- ・ 「穴窯講座（初級向け）－茶碗をつくる」

<開催期日> 10月23日（日）

講師の指導のもと、茶碗をテーマに作品づくりをした。講師：六代 上田直方、参加者数：15名

ウ 穴窯焼成クラスの開催（講座開催回数：2回、参加者数29名）

穴窯講座に複数回参加した人を対象とし、自由に制作してもらい、窯詰めから焼成までを体験してもらい、焼成に関する知識と技術の普及を図った。

- ・ 焼成クラス前期 参加者数：15名

焼成日程 9月21日（水）から10月25日（日） 窯だし10月2日（日）

- ・ 焼成クラス後期 参加者数：14名

焼成日程 3月14日（水）から3月18日（日） 窯だし3月24日（土）

エ 登り窯講座の開催（講座開催回数：3回、参加者数54名）

- ・ 「登り窯講座（上級向け）－大壺をつくる」

<開催期日> 7月16日（土）・17日（日）

講師の指導のもと、大壺を2日間にわたって制作した。講師：篠原希、助手：鎌美友希、参加者数：15名

- ・ 「特別企画グ・ル・メなやきものたち関連企画 登り窯講座（初級向け）－片口鉢をつくろう」

<開催期日> 7月30日（土）

講師の指導のもと、展覧会の出品作をヒントにして、注ぎ口がついた片口鉢を制作した。

講師：高橋 楽斎、助手：杉谷一考、参加者数：15名

- ・ 「登り窯講座（初級向け）－自由制作」

<開催期日> 8月28日（日）

講師の指導のもと、食器、茶碗など自由に作陶した。講師：大西左朗、助手：榎本佳子、参加者数：24名

（2）イベントの開催・誘致

陶芸の森を舞台に軽スポーツ、芸能、レクリエーションなど各種イベントの自主開催や公園利用者にとって魅力的で集客効果が見込めるイベントとして、野外コンサートを誘致した。また、春の連休には、地域グループの主催による陶器市を開催した。

ア しがらき作家市 in 陶芸の森の開催

5月の連休に実行委員会形式で「第5回 しがらき作家市 in 陶芸の森」を開催した。この事業により、陶芸関係者には来園者の多いゴールデンウィーク中の陶器販売の機会を、また、来園者には「市」のにぎわいと雰囲気を提供することができ、好評を得た。

<開催日時>

平成23年5月2日(月)～5日(木)の4日間

出展者、来園者数等

ブース数 76件

出展者数 約90人

来園者数 16,975人(4日間)

イ セラミック・アート・マーケットの開催

「作品に触れ作家に触れる」をテーマに県内に在住、在勤の陶芸をはじめとする作家が、自らが制作した質の高い作品の販売をおこなう、作り手と使い手の出会いの場を陶芸の森が提供した。また、新たに陶芸の森のブースを設け、デザイン事業で開発した試作品や、スタジオ・アーティストの作品の展示紹介をおこなった。

<開催日時>

平成23年10月8日(土)～10日(月)の3日間

出展者、来園者数

ブース数 161件

出展者数 122名

来園者数 26,253人(3日間)

展示芸術大賞について

展示芸術大賞は、出展者の作品の展示について、開催期間中、採点を行い最終日に集計し、評価の高かった出展者に下記のとおり賞金を授与した。

金賞・・・陶工房 鮫島 (鮫島 豊)

銀賞・・・陶房 阿伝 & 藤原康宏 (富増彰良)

銅賞・・・器のしごと (村上直子)

(3) 作品の貸出事業

県民に気軽に陶芸に親しんでもらえるよう、創作研修館で制作されたスタジオ・アーティストの研修作品やゲスト・アーティストの作品を、前年度から継続して、びわこホテル、ホテルピアザびわ湖、県立図書館に貸し出したほか、新規に、陶芸の森の事業PRを目的に滋賀県甲賀合同庁舎ロビーに、陶芸の森コーナーを設け、作品5点の展示をおこなった。

(4) ホームページ・バナー広告

陶芸の森ホームページに協賛広告を募集し、よって収入の増を図った。

テキスト広告 9件/月平均

(5) 観光および集客促進のための広報活動

滋賀県南部地域の観光拠点としての陶芸の森を広くアピールし、多くの観光客を集客するために新聞等の媒体への広告をおこなうとともに、信楽観光協会等と連携し、「旅行会社企画・仕入れ及び販売担当者意見交換会」に出席し、陶芸の森のPRのためのプレゼンテーションをおこなった。

また展覧会や各種講座等、施設の案内などがわかりやすく情報提供できるよう、ホームページの充実を図った。

(6) 図書室の運営

陶芸に関する専門機関の図書室として、スタジオ・アーティスト等の要望に応えられるよう専門書など蔵書を整備するとともに、貸し出しをおこない、業界や一般に広く陶芸文化の普及を図った。

貸出件数 13件

3. 施設の管理

陶芸の森が、地域の産業、文化および観光の拠点施設として機能し、また来園者にとってもやすらぎ感のある施設となるよう良好な状態を維持し、一層の利用が図られるよう、日々巡回しながら適切な維持管理に努めた。また各施設のバリアフリーにも配慮し、子どもや高齢者、障害者の方にも利用しやすい施設管理をおこなった。

また、地域活性化交付金を使って、陶芸館、窯場等の雨漏り修繕や作業場の空調設備の設置、園内歩道や駐車場の舗装や穴窯の修繕等を行った。

さらに、陶芸の森全体の見所などをおさめた観光ミニ冊子を活用したり、駐車場表示の変更を行うなど、親切で丁寧な園内の案内と誘導に心がけ、利用者からの要望等については、迅速かつ適切に対応できるよう情報の共有化を図り、利用者にとって快適なサービスの提供に努めた。

II. 陶芸文化の発信事業

1. 展覧会開催事業

陶芸館では、時代の動きをいち早くとらえながら、産地への刺激を意識し、地域産業の振興にリンクするテーマや、滋賀独自のやきもの文化や歴史、県内在住の現代作家たちの様相など、地域に根ざした展覧会を展開してきた。今年度からの5カ年には、①誰もが楽しめる「開かれた美術館」（ユニバーサルミュージアム）、②滋賀の陶磁器産業デザインの活性化につながる展覧会、③美術館としてのブランドイメージを保持するような芸術性が高い国内外の陶芸展、④滋賀ならではの伝統文化を捉えた陶芸展、という大きな4つの柱を基本にしながら、国内外の陶芸の魅力を分かりやすく紹介する展覧会を企画発信した。

今年度はこれまでにない新しい視点からメッセージを発信し、陶芸の森と信楽をさらにアピールするとともに芸術性が高い展覧会を開催する。まず特別展1では、19世紀イギリスのアーツ&クラフツ運動におけるデザインの巨匠の回顧展を開催し、優れた陶磁産業デザインを紹介した。また特別企画1と2では、「開かれた美術館」として近江の“街道”や“グルメ”という誰もが親しめる身近なテーマから、近江の古陶磁、現代のうつわと食を題材にした陶の造形作品を紹介。さらに特別展2では、陶芸の森の特色であるアーティスト・イン・レジデンス事業と連携し、画家や彫刻家らによる陶芸作品など、陶芸の森のコレクションを再構成し展観した。

来園者の少ない冬季（12月下旬～2月末）には陶芸館を休館し、収蔵品の状態チェック、陶芸に関する調査、普及活動、展示設備点検にも力を入れた。

（1）展覧会概要

ア. 特別企画1「近江に花開いたやきもの 街道とともに…」（平成22年度からの継続事業）

<開催期間> 平成23年4月1日（金）～4月17日（日） 15日間

<入館者数> 1,307人（87.1人/1日）

自然に恵まれた風光の地、近江は“みち”の国としても知られている。東西交通の要衝として、古くから日本を代表する街道が集散し、特色ある文化が育まれてきた。近江が誇るやきもの文化も

そのひとつといえよう。本展では、近江（滋賀）の歴史と文化の形成に重要な役割を担った「街道（みち）」をテーマに、湖国ゆかりのやきもの133件を展示紹介。東日本大震災直後には、団体客を中心に入館者の落ち込み傾向が見られたものの、近江の特色とその魅力をやきものを通して紹介する陶芸の森らしい企画、と多くの観覧者の方々から好評をいただいた。

イ. 特別展1「ウィリアム・ド・モーガンー楽しい生活を彩るタイルと陶器」

＜開催期間＞平成23年4月23日（土）～6月19日（日） 50日間

＜入館者数＞6,501人（130人／1日）

19世紀後半のイギリスでは、ウィリアム・モリスが機械文明を批判し、手工芸が生活と深く結びついた中世を理想とする美術工芸運動〈アーツ・アンド・クラフツ〉を唱えた。ウィリアム・ド・モーガン(1839-1917)は、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動における重要な芸術家のひとりである。手仕事を強調しながら独自の製法を確立し、ラスター彩など陶器用の新しい釉薬や絵の具を開発しながら、人々の心豊かな生活のために数多くのタイルや大皿などの傑作を世に送り出した。本展は、陶器デザイン史上に大きな足跡を残しながらも、殆ど日本では紹介されることがなかったウィリアム・ド・モーガンの仕事の全貌を紹介した。東日本大震災直後の開催となり、団体客を中心に入館者の落ち込み傾向が見られたが、ギャラリートークや関連の体験講座については、人気が高く多くの参加者があった。

ウ. 特別企画2「陶芸を楽しむ“グ・ル・メ”な、やきものたち」

＜開催期間＞平成23年6月30日（木）～12月11日（日） 142日間

＜入館者数＞20,019人（140人／1日）

誰もが親しめる身近な〈グルメ〉をテーマに、近江の古陶磁や現代のうつわ、食にまつわる陶の造形作品など157件を紹介。鑑賞者の感性に直接的に訴える展示手法で、多くの来館者から好評を得た。さわって鑑賞する作品や盛り付けたい料理や食材を付箋に書いてパネルに貼るコーナーの設置、料理を盛り付けた写真パネルなど、積極的な取り組みが功を奏したようである。パネルの料理写真の展示や加盟店でのサービス提供など、信楽料理旅館飲食業組合との協同企画でも成果がみられた。また、陶芸家と料理人、そして料理評論家がうつわの魅力語るトークセッションを開催した。

エ. 特別展2「陶芸の魅力×アートのドキドキ」

＜開催期間＞平成24年3月3日（土）～3月31日（土）25日間

（平成24年4月1日（日）～7月6日（日）平成24年度への継続事業）

＜入館者数＞2,192人（84人／1日）

陶芸に打ち込んできたのは、陶芸家だけではない。ジョアン・ミロら画家たちのやきものは、戦後の陶芸に大いに影響を与えた。これまで陶芸の森は、陶芸家だけでなく画家や彫刻家らによる陶芸制作の舞台にもなっており、近年では画家の奈良美智らがこの陶芸の森でやきもの制作を行った。あえて素材や技術の難しさを越えて、陶芸に身を委ねようとする作家たち。何が彼らを陶芸に駆り立てるのか。アートと陶芸のはざままで制作をする作家たちは、やきものにどんな魅力を見つけたのか。→赤字部分トル本展では、画家や彫刻家らが土に魅せられ、陶芸に挑戦した作品のほか、アートと関連しながら成熟してきた現代陶芸の一断面を、日本やアメリカなどの陶芸シーンから紹介した。

オ. 収藏品収集（管理）事業

平成23年度は91件（海外の現代陶芸22件・日本の現代陶芸6件・滋賀ゆかりの陶芸63件）を収集。収集に際しては、収藏品収集審査会及び収藏品価格評価委員会を開催した。外部委員で構成される両会で、収集対象作品の品質の審査を行うとともに、その適正な評価額を定めた。

また、近年各方面で指摘されている危機管理への対策も計画的に実施。盗難及び地震対策、カビや共箱の虫食い防止など、収蔵品の保全にさまざまな対策を講じた。作品の点検と収蔵庫の環境整備に努めるとともに、冬期閉館中は展示用の什器や周辺機器の点検整備も併せて実施した。

- ・平成24年1月27日（金） 収蔵品収集審査会、収蔵品価格評価委員会（1/28～2/8）
- ・平成24年1月31日（火） コクヨ製展示ケースの定期点検及び調整を実施
- ・平成24年2月 2日（木） 高所作業台の定期点検及び修理（3/6～27）を実施

カ. 陶磁ネットワーク会議への参加

<開催日>

本会議：平成23年6月16日（木）～17日（金） 於：岐阜県現代陶芸美術館

巡回展ワーキンググループ会議：①平成23年6月17日（木）於：岐阜県現代陶芸美術館

②平成23年8月19日（金）於：岐阜県現代陶芸美術館

現代陶芸ワーキンググループ会議：平成23年6月17日（木）於：岐阜県現代陶芸美術館

平成20年度に結成された県立7館の陶磁器専門美術館・博物館による「陶磁ネットワーク会議」は、加盟館の交流や情報交換を深め、昨今の予算削減に対応するための、共同企画の立案、各館所蔵品の相互利用、緊急時の協力体制を目的とする。平成23年度は岐阜県現代陶芸美術館での第4回陶磁ネットワーク会議に参加した。また本ネットワークによる展覧会企画を行う「巡回展ワーキンググループ」と現代陶芸の共同研究をすすめる「現代陶芸ワーキンググループ」の会議に担当者が参加し展覧会準備および情報交換などの活動をおこなった。

<参加館>

滋賀県立陶芸の森、兵庫陶芸美術館、愛知県陶磁資料館、岐阜県現代陶芸美術館、福井県陶芸館、茨城県陶芸美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館、佐賀県立九州陶磁文化館

キ. 陶芸館ギャラリー企画展

陶芸館ギャラリーは、気軽に利用できる館内唯一の無料展示スペースである。これまでも陶芸の森の役割や事業を、入館者に理解して戴く情報発信の場として活用してきた。一昨年度からは県内若手作家の活動支援、創作研修や普及啓発の事業の紹介などに特化し、陶芸の森の独自性をより明確にするとともに、機能面での強化を図っている。平成23年度からは、各展覧会の会期を約1ヶ月に延長し、内外への情報発信機能をさらなる充実に努めた。

<内容及び開催期間>

(1) 「シリーズ湖国の陶芸家ー現代へのつくり手達の眼差し」

滋賀の中堅・若手陶芸家を公募し、2回2人の陶芸家を紹介。滋賀の“やきもの文化：産業”の振興を見据えながら、県内在住作家のやきもの観やその動向など、最新情報の収集と発信に努めた。

①「高間智子ーはなことば うつろう記憶と感情の〈かたち〉」

<開催期間> 平成23年10月1日（土）～10月30日（日） 26日間

高間智子は、記憶の深層に秘めた感情を、植物のイメージに託して表現している陶芸家である。これまで、何層にも重ねた素地を浮彫りしてゆく制作手法に取り組んできたが、今展では色（泥漿）を加えてゆく象嵌での制作に挑戦。今回の新作への取り組みは、新たな展開に繋がる契機となった。

②「津守愛香ーちょっとシニカルで、ゆかいな仲間たち」

<開催期間> 平成23年11月3日（木）～12月 4日（日） 28日間

津守愛香は、人物や動物をモチーフに制作を展開している陶芸家である。今回はとくに作品相互の関係を重視し、会場全体を物語風に仕立てた展示構成に挑戦。それが功を奏して、小さな作品が中心で点数もさほど多くはなかったものの、彼女のイメージの特性を存分に伝えることができた。

(2) ギャラリー子ども企画

①「土の造形」展

陶芸の森が全国に先駆けて取り組んできた小学校との連携授業や宝物づくり事業独自の普及啓発事業の成果を、子どもたちが制作した作品を通して内外に発信した。

<開催期間> 平成23年7月16日(土)～8月31日(水) 40日間

②「“さわって”読み取る、まん〇ねんどのメッセージ」展

平成21年度から参加している科学研究費プロジェクト「(通称)ユニバーサル・ミュージアム研究会」の“誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究”の関連事業で、点字を貼り付けた作品制作し、触って鑑賞できる展示を行った。

<開催期間> 平成23年12月6日(火)～12月11日(日) 6日間

ク. 博物館実習

陶芸館では、博物館学芸員資格取得のための実習生の受け入れを平成7年度から行っている。これまで、関西圏を中心に21大学・119人の学生を実習生として受け入れてきた。平成23年度は、6名の実習生を受け入れ、各施設や特別展の見学実習のほか、展覧会と普及啓発についての講義、また作品の取り扱いと梱包や調書の作成など、実物資料を扱う実技演習をおこなった。

<実施期間> 平成23年8月23日(火)～8月26日(金) 4日間

<受入大学> 京都外国語大学1人・京都府立大学1人・佛教大学2人・龍谷大学2人

ケ. 特別鑑賞塾

特別鑑賞塾は、収蔵作品を参加者が手に取ってもらい、学芸員による解説を聞きながら鑑賞する少人数制の講座。ガラス越しの鑑賞では得られない、作品をより身近に体感できる取り組みとして実施している。平成23年度からは有料制を導入するとともに、これまでの要望に応じて開催回数を春と秋の2回に増やすことで、より多くの方々に参加の機会を提供した。

①平成23年6月3日(金)、6月5日(日) 参加者：20人

対象作品：大西忠左「信楽自然ビードロ釉四ツ口茶注」平成2年(1990)

姥餅焼「鉄絵匂入り皿」明治時代前期(20c 前半)

②平成23年11月22日(火)、11月23日(祝) 参加者：20人

対象作品：梅林焼「三彩繫薬味入」江戸時代後期(18c-19c前半)

八木明「青白磁入子鉢」平成8年(1996)

2. 創作事業

(1) アーティスト・イン・レジデンス事業

陶芸の森では、国内外の陶芸家、美術家の招聘および受け入れをおこない、平成23年度末で48カ国、869人の陶芸家らが参加してきた。

平成23年度については、東日本大震災、特に地震後に発生した福島原子力発電所の事故の影響で、海外の作家については、キャンセルが増えるものと、当初考えていたが、結果としては、ゲスト・アーティストについては6人を招聘し、スタジオ・アーティストについては、延べ33人受け入れた。

ゲスト・アーティストについては、6名の陶芸家の持つ様々な技法や感性を共有することができた。また、はじめてインドからアディル・ライター氏を招くことができ、今まであまり情報のなかったインドの現代陶芸についての情報を得ることができた。

スタジオ・アーティストの日本の若い作家が、長期間滞在し、東京をはじめ各地のギャラリーで積極的に個展を開催した。元気のある若手の作家たちの活躍が目立った。また、平面など、陶芸以外のメディアを学んで陶芸の森で「やきもの」に取り組む作家がいたことも、スタジオを活性化で

きた理由だと考える。これらのことをとおして、陶産地である信楽のアーティスト・イン・レジデンスとして一定の役割を果たせたとともに、新しい陶芸文化の創造につなげることができた。

ア. ゲスト・アーティストの招聘とスタジオ・アーティストの受け入れ

・ゲスト・アーティストの招聘

加藤喜代司（日本工芸会正会員・滋賀県甲賀市在住）（6月～9月まで滞在）

山田 晶（滋賀県大津市在住）（8月～2月まで滞在）

アディル・ライター（インド在住）（9月～12月まで滞在）

グウィン・ハンセン・ピゴット（オーストラリア在住）（1月～3月まで滞在）

吉村敏治（京都精華大学講師・京都市在住）（8月～3月まで滞在）

サダシ・イヌヅカ（ミシガン大学教授・アメリカ在住、オープン・スタジオ対応）（5月）

計 6人

*当所予定していた、レイコ・イケムラについては、平成24年4月に変更した。

・スタジオ・アーティスト、短期スタジオ・アーティストの受け入れ

8カ国から計33人をスタジオ・アーティストとして受け入れた。

日本	20人	デンマーク	1人
インドネシア	1人	台湾	4人
中華人民共和国	1人	アメリカ	2人
フランス	4人		

計 33人

イ. 国内外の機関との連携強化等

独立行政法人国際交流基金主催の「東アジアクリエイター招へいプログラム」（「21世紀東アジア青少年交流計画 JENESYS Programme」）については、インドネシアから1人の陶芸家を受け入れた。また、フランスの美術工芸サポート団体であるアトリエ・ダールからは、4人の陶芸家を受け入れた。

ウ. 地域での情報発信

(ア) 「やきもの技術相談員制度」および資料閲覧室の活用

「やきもの技術相談員制度」については、スタジオ・アーティストを対象に3回にわたり、釉薬の技術指導等をおこない、来館している陶芸家たちに貴重な経験を伝授した。

また情報閲覧室については、日常的に創作研修課職員が、スタジオ・アーティストへの指導、助言にその資料を提供した。また併せて平成22年度に引き続き、資料の整理、追加の作業を継続した。

(イ) 信楽焼の担い手たちとの交流

陶芸の森のレジデンス事業を核に、若手の技術者や作家らと近隣の美術系大学の陶芸科関係者らとの交流を推進する機会を設けることで、お互いの感性を磨き活性化をはかることを目的に京都市立芸術大学陶芸科とワークショップを試行した。

(ウ) 創作研修館オープン・スタジオ

アーティスト・イン・レジデンス事業の周知のため、「創作研修館オープン・スタジオ」として、計6回、スタジオ公開日を設け、ゲスト・アーティストなど滞作家らによるレクチャーやワークショップなどを盛り込み、信楽焼産地の中での交流の場とした。

第1回オープン・スタジオ（5月21日(土)）

「創造とからだ」サダシ・イヌヅカ（アメリカ、ミシガン大学教授）、参加者65人

第2回オープン・スタジオ（7月17日(日)）

スタジオ・アーティスト 盧 熾宇 (ルウ・イェンユ) レクチャー及びゲスト・アーティスト加藤喜代司アーティストトーク、参加者 45 人

第 3 回オープン・スタジオ (9 月 19 日 (月))

ゲスト・アーティスト 山田晶 (参加者 46 人)

第 4 回オープン・スタジオ (11 月 13 日 (日))

ゲスト・アーティスト アディル・ライター (参加者 56 人)

第 5 回オープン・スタジオ「自作とその周辺について」(2 月 18 日(土))

ゲスト・アーティスト 吉村敏治 (参加者 34 人)

第 6 回オープン・スタジオ「自作について」(3 月 18 日(日))

ゲスト・アーティスト グゥイン・ハセン・ピゴット (参加者 28 人)

計 6 回

3. 子どもやきもの交流事業

陶芸の森の特性を活かして、やきものに関する鑑賞教育や体験教育をさまざまな形で積極的に行う。学校との連携プログラムをさらに充実させ、信楽焼をはじめとした陶芸文化の普及や、陶芸の森へのリピーターを促進し、次世代に亘る陶芸の森ファンの獲得を目指した。

(1) 「本物と出会うー総合的学習プログラム事業」宝物事業と連携

陶芸の森の「本物と出会うー総合的学習プログラム事業」への参加校が、年々増加している。陶芸の素晴らしさや、不思議を伝える授業プログラムを展開する学校への出張授業、校外学習の学校を迎える来園プログラムなど、美術館の事業として、さらに内容の充実をはかりながら進めた。またこの事業では、新規のプログラムの開拓や講師養成などを進め、「世界にひとつの宝物づくり事業」と連携し、陶芸館ギャラリーを活用して連携授業の成果作品展を開催。子どもたちが制作した作品を通して信楽を訪れるきっかけをつくり、来園者の新規開拓、展覧会への動員につなげた。

- ・ 連携授業 4, 774 人(60 件)
- ・ 学校からの来園プログラム 804 人 (7 件)
- ・ 陶芸館ギャラリーを活用した連携授業の成果展の開催
- ・ ねんどと遊ぶ事業 335 人 (7 件)

(2) 夏季研修会ー美術館との総合的学習のあり方を探る

世界にひとつの宝物づくり事業と連携

<開催期間> 平成23年8月2日 (火)

<参加者数> 33人

学校教育や社会教育、美術館・博物館に携わる関係者を対象に、参加者が実際に本物に触れるなど、実践をとおして陶芸や美術が子どもの健全な成長に果たすための、美術館の役割を考えた。この研修会は、MIHO ミュージアムと連携し、陶芸の森では展覧会見学とワークショップで構成した。事業の運営は、世界にひとつの宝物づくり事業と連携をとりながら、両者の広報活動として広げた。

なお、この研修会に併せて連携授業等で制作した子どもの作品を夏休み企画としてギャラリーで展示発表した。

(3) 広報活動

- ・ 学校支援メニューフェア参加(近江八幡、県教育委員会、守山市主催)
- ・ シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践ー博物館から始まる手学問のすすめ」(科学研究費プロジェクト「(通称)ユニバーサル・ミュージアム研究会」の“誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究”の関連事業)で、世界にひとつの宝物づくり実行委員会とともに実践報告を国立民族学博物館で行う。

Ⅲ. 産業の振興に関する事業

信楽焼の持っている伝統技術を将来に継承し、人材育成を図ること、いわば将来の発展への足場強化を目的に、信楽高校デザイン科の外部研修の受け入れと、信楽陶器工業協同組合青年部を対象にした登り窯焼成事業を実施した。

また、信楽産地の新製品開発をデザインの側面から支援することを目的に、業界へのデザイン提供を図る「デザイン活性化事業」、新しい動物の置物の開発を目的にした、「デザインコンペ アニマル・フィギュア 動物の置物」事業、「既存製品をベースにした加飾による新製品の開発」の3つの事業を実施した。

1. 信楽高校デザイン科外部研修受け入れ

伝統的な陶産地である信楽焼の将来の担い手を育成するために、「つくられるものの公共性に対する認識」と「個人の自由な表現」の両立という、デザインにおけるバランス感覚を養うため滋賀県立信楽高等学校のデザイン科2年生を対象に、陶芸の森にて実習をおこなった。

<開催期日>

絵付け実習 平成24年3月19日(月)

- ・講師 大原 薫 (甲賀市指定無形文化財保持者・信楽焼伝統工芸士)
- ・参加者等

絵付け実習参加者(2年生) 25名

園内施設見学者(1年生) 18名

2. 登り窯焼成事業

信楽陶器工業協同組合青年部を対象に、かつて信楽の製陶業の隆盛を支えた施釉陶器の技術、登り窯焼成技術の継承を目的に、施釉した作品を二の間、三の間に詰め焼成した。また、火袋から三の間までで実際に焼成をおこなうことで、焼成技術の継承、また、登り窯への理解を深めることが出来たと考える。

<開催期日>

窯詰め 10月9日(金)～11日(日)

焼成 9月13日(火)9時から9月17日(土)8時まで

窯だし 9月25日(日)

焼成時間 95時間

3. デザイン活性化事業

(1) デザイナー等との新商品の開発

すでに、販売実績のある、ナタリー・ラーデンマキデザインの土鍋「PATA」のシリーズとして角鉢をメーカーと連携してデザイン開発した。

また、同じくナタリー・ラーデンマキデザインの耐熱食器(手付き鍋、フライパン等)の試作をおこなった。そのほか、陶芸の森に滞在している陶芸家との連携で、エジプシャン・ペーストと呼ばれる解化生地をつくり、装身具などに応用した。

平成19年度に信楽焼関連企業と設立したフィンランド・デザイン研究会をベースに参画企業を商工両協同組合傘下の企業に再度呼びかけ、拡大をはかり、フィンランドだけではなく、陶芸の森のレジデンス事業で来館制作したことのある作家を中心に、地域産業である信楽焼の企業と連携して商品デザインをおこなった。

(2) 「デザインコンペ アニマル・フィギュア 動物の置物」の新製品開発

陶芸の森では、現代の生活にマッチしたモダンでユニークな、「動物の置物」の開発を目的に、製品モデルの公募をおこない、優れたモデルについては、賞を授与し、入賞作品については、陶芸の森で試作をおこない、信楽産業展示館で展示紹介した。

作品募集期間：5月10日～8月10日まで

受賞作品： 金賞 ネムリーヌ 伊庭 靖二
銀賞 子いぬとちょうちよ 谷井 香奈
銅賞 つぼたん 増木 ヨシオ

(3) 既存製品をベースにした加飾による新製品の開発

信楽在住の陶芸家都丸俊夫氏にデザイン、加飾を委託し、彫り、象嵌などの技法を用いた3種類のガーデンセットの試作をおこなった。

(4) 信楽産業展示館の活用

陶芸の森でおこなっているデザイン活性化事業の成果について、信楽産業展示館にて展示紹介した。

信楽陶器まつりに開催された、「第79回信楽陶器総合展」(主催：信楽陶器工業協同組合)に22年度のデザイン活性化事業で制作したガーデンファニーチャー「青花波」、「白華」(谷野明夫デザイン)を：「ガーデンファニーチャーへの加飾・産業と芸術の出会い」のタイトルで出品し、加飾の可能性を提示した。

展示期間：10月8日～10月25日まで

また、23年度の「デザインコンペ アニマル・フィギュア 動物の置物」入賞作品計3点を干支展(主催：信楽陶器卸商業協同組合)において展示した。

展示期間：12月27日(火)～1月29日(日)まで

IV. 企画事業

1. ミュージアムショップの運営

来園者に、より一層陶芸を身近に感じて頂けるようなサービスを展開した。平成23年度からは、従来のショップの取り扱い規模を縮小し、「コーナー」として再編し、展覧会図録や陶芸関係書籍およびオリジナルグッズなど独自色のある商品の販売をおこない、併せてインターネットの活用したオンラインショップでの商品の提供や販売の促進に努めた。

販売数： 4, 523点